まえがき

これまで何回も言及していることであるが、共同利用の研究施設はコア・ファシリティ（core facility）という考えを持たなければならない。いつも先端技術を意識し、多くの学術論文にふれつつそれによってできることを認識していなければならない。最初からニーズがあるなら、例えば学内外に補助金申請し、なければ全学に技術の進歩によってできることを喚起してほしい。知識が先行するこの取り組みは、その知識に基づいてどのような人材が必要で育成・雇用しなければならないか、を実践しなければならない。機器も然りである。最初に新品の機器ありき、でいくと成果は小さい。小田所長の時代にこれをお願いし、イメージング、培養、その他複数の空間と必要な機器の選定を実施してきた。一つ一つのユニットは小さくても、そこで大きな成果を出すためには、綿密な管理とユーザへの丁寧な指導が必要である。共用施設を利用できたために大きな成果があがった、とユーザから感謝され、また同時にユーザからの協力を得られるような体制の構築が重要である。令和 5 年度は巴の増築が完了するので、改めて上記をお願いする次第である。

令和５年３月

学長
丸　義朗

令和 3 年度には総合研究所と統合医科学研究所が統合され、総合医科学研究所（総研）となりました。ここに、新しく統合された総研としての初めての総研紀要が完成いたしました。総研は共同利用施設（本院および足立医療センター、八千代医療センターに設置）、研究部門、解析サービス部門からなる研究および共同利用機関です。基礎・臨床医学を広く網羅した研究活動を円滑に行なうことができる環境を整備・提供することともに、独自の研究を推進することを目的として設けられています。学内研究者により広く活用され、研究が進められています。

本紀要には総研を利用した 63 の研究成果と総研研究部門の 4 つ研究成果がまとめられており、前年度の研究成果に比べて増加しております。総研が全学で活用され、活発に研究が行われていることを示しています。これらの研究をさらに進め、きちんとした論文として発表していただくことを期待いたします。

令和 5 年夏には巴研究教育棟の増築部分が竣工予定です。また、今後も多くの研究者が総研を利用して、本学の研究成果がより充実していくことを願っています。

令和 5 年 3 月

研究部門担当理事
肥塚直美